

ぷちインフォ

’05 6月号

—湿布について—

現在日本で多く使われている湿布ですが、その発祥は紀元前のギリシアだったといわれています。当時は鉛丹(四塩化鉛)と豚脂に生薬を混ぜたものを、皮や布に塗りその布を体に貼ったり、キャベツを湿布に使用したりしたともいわれています。

古代ギリシアで発祥した湿布は、中国を経由して日本に入ってきましたが、日本に伝わったのは江戸末期～幕末にかけてだといわれています。

当時は軟らかい油状のぬり薬を「軟膏」と呼ぶのに対し、固形の薬剤を貼り付けることからこれらの薬を「硬膏」と呼んでいました。「膏」という文字は動物性の脂を指す言葉だそうです。

炎症や痛みを鎮める湿布にもいろいろな種類があります。

冷湿布・・・はっか油などスーッとする成分が含まれており清涼感を与えてくれます、腫れを押さえ痛みを和らげます。

温湿布・・・唐辛子エキスなど皮膚を刺激する成分が含まれており、血行を良くすることができます。

打ち身や捻挫など急激に生じた痛みには冷湿布で炎症を抑えるのが良く、長年の腰痛など慢性的な痛みには温湿布で血流を良くするのが良いとされます。

パップ剤・・・湿布薬のなかでも水分を含んでいて、その蒸発作用により冷却効果を多く期待することができます。

プラスター剤・・・パップ剤とは異なり、水分を含まない脂溶性高分子を使用する。水分を含まないため、冷却効果はパップ剤に比べると少ないですが、薄く剥がれにくいとされているのが特徴です。テープ剤とされることも多いです。

使用される薬剤は、パップ剤もプラスター剤も同じものが使用されていますので効能としては、どちらも同じ働きをしてくれます。

湿布の使い方

湿布の貼り方・・・ひざや肘などの関節に貼る場合は、湿布の中央に2～3cmの切り込みを入れて、4隅を引っ張るように貼り付けると剥がれにくいです。

湿布の剥がし方・・・湿布を剥がす際に皮膚が引っ張られて痛いという方は、入浴の際にぬるま湯を湿布にかけて、くるくる丸めながら剥がすと良いようです。

(注意) 温湿布の場合は皮膚への刺激が強くなる可能性があるため、入浴の30分から1時間前に剥がすようにして、入浴後ほてりがさめてから新しい湿布を貼るようにしてください。

—親切、便利、安心、お役に立ちますノムラ薬局